

俳句雑誌



2023. 8 • 9

SORA 107号

空

令和5年8月20日発行

第21巻1号

通巻第107号

女神

柴田佐知子

日の神も鬼も迎へて山笠^{やま}飾る

武将より鬼の手太き飾り山笠

豪傑も鬼も目を剥く飾り山笠

追山笠^{おひやま}の一打待つ息揃ひけり

追山笠の男肩より走り出す

山笠を舁^かく男火となり駆け抜くる

山笠果てし街ゆつくりと動き出す

山笠果てて男小さくなりにつけり

―「俳壇」八月号より―

つぶさるる鶏選ばるる祭前

連山は闇となりたる素足かな

簡単にひらく裏木戸祭笛

帯長く垂れてしまひし祭の子

神木を森の主として涼し



福岡 高倉 和子

良き人はつまらぬ草矢打ちにけり

割り切つて働くことに五月来る

隣人も同じ間取りや更衣

水槽に俗世の濁り夕薄暑

滝壺に吸ひ込まれゆく迷ひかな

三つ指をつきて始まる夏芝居

父母を置いてきたりし昼寢覚

羽拔鶏転がるやうに走り出す

東京 中田 みなみ

行く春や暦代りの献立表

囀や味はひ足りし皿光り

毛の中に春を倦む目のペルシャ猫

アルバムにふたり残され桜餅

泰山木の薬を見下ろす目覚めかな

表札をはづしたる家緑さす

悼二句

胸元に庭のあぢさゐ柩閉づ

紫陽花やすぐ戻るかに置眼鏡

長崎 荒井 千佐代

潮風の抜くる駅舎やつばくらめ

べた凧を時をり見ては種を蒔く

青空は死者のものなり桐の花

蜘蛛の罎を払ふに使ふちちの杖

ターザンの似合ふ箱庭でき上がる

入り船の波がうねりに芙美子の忌

ふりかけに飯を汚して薔薇の昼

寝返れば廃船見ゆる暑さかな

埼玉 服部 早苗

コロナ禍の我鬼忌や暮し整はず

夜濯やひとりのものを洗面器

夕暮れの水の吸ひつく藻刈り舟

ここからは妙法の火の見えぬなり

七輪の金輪の錆や震災忌

秋茜ついと煉瓦の霧笛橋

弓なりの雨の一湾杜鵑草

台風一過スコアボードに零ならぶ



北九州

深川淑枝

葉莢の手につめたくて初燕

雷管に火の跡のこる余寒かな

たんぽぽの乳つきし指草に拭き

まんさくや湧きし水また地に吸はれ

蜂飼ひに空いろの湖日暮まで

草も木も微熱をもてる朧かな

ほのぼのと笛濡らす息仏生会

猿遣ふ太鼓鳴りゐる社日かな

広島

戸栗末廣

春は名のみ山へ山へと深轍

戦争は否と一面犬ふぐり

啓蟄や鴉が妙なことを言ふ

落第と聞き換気扇洗ふ

花束のほどけしごとく春夕焼

本棚の混みゐてしづか鳥の恋

さくらさくら堤も川も膨らめる

子雀を拾ふ夕暮れごろかな

福岡

角野良生

特攻の戦果は知らず雲の峰

何も起こらぬ一面の蟻地獄

流灯に後姿のありにけり

蚊遣香置かれてありぬ懺悔台

空の青加へて水の澄みにけり

水浴ぶる小鳥の水も澄みにけり

耶蘇の血に染まりし城や螢草

カルデラの大きさの秋ありにけり



空集抄 柴田佐知子抄出

花氷きれいな顔で別れたし

水のごと夜が明け遠野馬の市

萱の高さ越え走りだす山火かな

父母すでに先祖の遠さ盆の月

颱風に怯えて少し老いにけり

湯中りのごとく戻れる恋の猫

手を打つて草叢へ蛇追ひ遣りぬ

蛇の衣この脱ぎやうは男蛇

日向ぼこして一人づつ消えてゆく

猫が来て鵲の縄張り崩れたり

吉田 律

中田みなみ

深川 淑枝

角野 良生

石橋 幾代

高倉 和子

曾根 富久恵

大西 乃子

戸栗 末廣

宮井 知英

地を捲るごとく大風引き起こす

野遊びやただ寝ころんで雲を見る

龍天に登る弦楽四重奏

父の日も日曜大工怠らず

生きてゐる実感青芝に寝転べば

老鶯や池覗く子を引き戻す

音立てて折り目ふくらむ紙風船

春の鳥腹まで浸かり水を飲む

ボール打つたびに飴や緑の日

後悔は釈迦に預けてソーダ水

立春大吉手術の後の白湯旨し

ライオンは檻でごろ寝や目借時

若葉寒二度寝の夢のあざやかに

野中みのり

今井 康子

えとう 樹里

永淵 恵子

窪みち子

伊藤 希

星加 鷹彦

高畑 桂

原 友子

鈴懸 るい

苑 実耶

森田 明成

兒玉 充代

捌きたる猪肉はみな平等に

孫の手でちよいと引き寄せ更衣

水温む園児の列のこんにちは

歌垣の山に火葬場百千鳥

涅槃図の混み合ひしまま暮れにけり

山吹へ傘をひと振りして乗車

湯たんぼの朝はへこんでをりにけり

草笛やをさな児ともう言へぬ歳

畝真直ぐ立つる百寿や春浅し

囀の雀ばかりとなりけり

階に立ち門徒見送る彼岸僧

着ぶくれて犬ころになる鞠になる

年の夜の湯船に揺らぐ子の玩具

坂口 学

後藤 園子

田岡 千章

三井所美智子

山本 則男

中村 瑞枝

田中とし江

仲里 奈央

林 徹也

岡村 尚子

河原 敬子

牧 康子

押田裕見子

菖蒲湯に良く働きし膝小僧

朧夜や主婦が無職か迷ふ欄

見つめられぶいと横向く金魚かな

振り向かず旅立ちし子や新松子

病室は海飛魚の滑空す

夏草に馬食みし跡都井岬

煮ゆるほど座のやはらげる牡丹鍋

友だちのやうな双子や冬ぬくし

魂の抜けゆく心地日向ぼこ

口に入る雪を楽しむ露天風呂

ふるさとは最後の砦冬隣

北斎の波より出でし宝船

マンモスの牙の湾曲夏に入る

林 れい

青木 朋子

宮原 孝一

横田 敬子

大瀬益太郎

山田 正子

今井 康子

矢野 綾子

吉田 悦子

松井 順子

松尾 康代

あさなが捷

神田たみ子